



左一階が読むと、入口の押電球がやさしい灯を点す下二つからは、キャリーの打ち上げをかなた手舞金が開けた。入居者だけでなく、舟からの来客もあり、賑やかな瞬間となった。



すべての木造の建物を壊してマンションを建てることも可能であったはず。しかし、そうしなかった理由は何か。「オーナーさん自身が古いものに愛着をもちたれている方なんです。(土地は命を育むもの)との思いから、賃貸であっても居心地の良さが最優先されるべきだとオーナー

さんは考えて、建物を残しながら活用する方法を選ばれましたと天野さん。オーナーの思いをうまくくみ取り、構造上の問題をクリアにし、現代に生まれ変わった大森ロッヂ。

手荒会の宴もたけなわとなり、迎りの陽もすっかり暮れ頃、大森を後にした。

コレクティブハウス聖蹟(東京都多摩市) 取材文 大城諒司 photo:新井 卓

多世代で暮らしを豊かに共有する

人間関係の多様さと広々とした空間

コレクティブハウス聖蹟が完成したのは2009年。特徴は空間や設備の共有化だ。生活の合理化を図ると共に、空間的にも精神的にも豊かな暮らしを実現した。それぞれの生活スタイルを守つつ、居住者同士がゆるやかに助け合い、いきいきと交流できる環境を目指している。

構成は、シェアタイプが8戸、ワンルームが6戸、1LDKが4戸、2LDKが2戸。年齢層は0歳代から70歳代までと幅広い。人間関係の多様さに加え、広々とした空間も大きな魅力だ。コモンキッチン、コモンペース、コモンロフト、コモンテラス、ウッドデッキ、屋上菜園など、住まいの一部を共有化することで、通常の賃貸物件では得ることのできない豊かさを獲得した。

居住者の一人、矢田浩明さんは、奥さんとお子さんの3人暮らし。入居前に行われ

たワークショップの段階から参加したという。そもそも、コレクティブハウスを選んだきっかけは、何だったのだろうか。「やはり、子供ができたことが大きかったですね。自分の少年時代を思い返すと、近所の家に気軽に上がり込んで、遊んだりしていた。かつてはどの家でも、そういう光景があたりまえだったわけですね。子育てには、親子関係、あるいは保育園や学校の関係だけじゃなく、(近所の人たち)のような中間的な存在が欠かせないと思うんです。けれども、現在の住環境で望むのは難しい。そんなことを感じていた時に、コレクティブハウスの存在を知ったんです」(矢田さん)

実際、矢田さんの5歳になる息子さん、ハウスの人々にみわいがいられているようだ。取材時も、最初は遠慮がちだったが、こちらから話しかけるとすぐに打ち解け、



2階のホールには子供用の遊具が置かれていた

人懐っこい笑顔を見せてくれた。以前は人見知りだったそうだが、今では物怖じしない性格になったという。

「助けあって育児ができるという安心感も、子育て中の親にとってはありがたいと思います」(矢田さん)

血縁や地縁ではない新しいつながり

山由佳理さんは、ご主人とお子さん2人の4人暮らし。山下さん自身は、学生時代からシェアハウスで暮らしてきたという。「シェアハウスの場合、基本的には単身者ばかりですし、年代や価値観も近かったと思います。ただ、結婚して、子供を授かると、自ずと生活のスタイルも変化します。子育てをしなが、仕事をめ、自分のやりたいことを続けていくことはなかなか難しい。その時、コレクティブハウスだったら家族だけではないつながりでお互い助け合える。ありがたいですね」(山下さん)

世帯も価値観も異なる居住者が入居している分、コレクティブハウスのものが、小さな社会として機能しているのだ。「上の子は、もう、だいぶ大きくなっているのですが、単身で暮らしている方が、休日にキャッチボールの相手をしてくれたりする。子供も(お兄さんに相手してもらった)と喜んでますよ」(山下さん)



ランドリースペース。共有の洗濯機が3台。洗濯時は、誰が使っているかわかるように、部屋番号を記したマグネットを洗濯機の本体につっかけておく



1階のホールには掲示板が、ハウスの案内をしていただいた矢田さん



屋上には広々とした菜園が設けられている。収穫物は食材として利用する。取材時にはほとんど収穫が終わっていたが、オクラなどが残っていた。「次の日曜日はほ草こうと思っているんです」(矢田さん)



2LDKタイプ。現在は空室



廊下は広々としていて、右手が居住者の部屋にあたる

取材に応じていただいた山下さん。



2階のコモンロフト。子供が遊んだり、グストルームになったり、用途はいろいろ

一方で、共用性に伴い、さまざまな約束事もある。通常の賃貸住宅の場合、建物や敷地内の維持・管理は、管理会社が行うケースが多いが、コレクティブハウスでは、入居者による自主運営というかたちを探る。たとえば、共用部の掃除や庭の手入れは、居住者が自ら行い、自分たちで「暮らしたるの責」を決めている。もちろん、居住者間での取り決めが必要になってくるが、「気に入らないことについては、月1回の定例会など、コミュニケーションの機会が設けられている。

ちなみに、前述の矢田さんは、息子さんに負けず劣らず、大の人見知りだそう。入居前、奥さんから「私は気にしないけど、あなたは大丈夫なの?」と念を押されたという。コレクティブハウスでは、他者と生活空間を共有すると共に、それに対し、他の入居者と積極的にかわる姿勢が求められるからだ。

「最初は心配でした(笑)。けれども、ワークショップの段階から、皆さんと顔見知りになって、次第に関係性ができあがって



夕方5時過ぎからコンキッチンでコミュニティの準備が始まる。通常は3名1組で行うが、ゲストが手伝うこともある。この日は、3名のゲストが参加



NPOコレクティブハウジング社

狩野三枝さん

コーディネーターの声

女性の社会進出や家族形態の変化、急速な少子高齢化など、暮らしは多様化しています。一人暮らしの女性、子育て中の核家族、シングルマザー、親御さん一人を介護なさっている方、一人暮らしの高齢者……。そういった方が増えているのが現状ですが、かつての「標準世帯」向けの住宅と「持家政策」が主体の住宅供給では、こうした変化に対応することができません。

NPOコレクティブハウジング社は「共に住む、共に生きる、共に創る」というテーマを掲げ、コレクティブハウスかんかん森(東京都豊田区)、スガモプラット(東京都豊島区)、コレクティブハウス聖蹟、コレクティブハウス大泉学園(東京都練馬区)の運営に携わってきました。

居住希望者は、まず、オリエンテーションに参加し、考え方を理解していただきます。そして、暮らしぶりを見てもうらため、既存のハウスを訪問。その後は、居住希望員として入会いただいたうえで、既存のハウスへの居

住を希望するの、企画中のプロジェクトに参加するのを決めるという流れになります。その他、自分の住みたい町でコレクティブハウスをつくりたいという人は、居住希望者と一緒に、まちあるきのワークショップを行ったり、仲間と共に企画づくりを行います。

ハウスづくりのプロセスでは、どんな暮らしを求めているのか、どういう空間にしたいのか、ハウスどう運営していくか等々を、居住希望者同士できちんと話し合います。ハウスが完成し、入居する段階では、入居者全員が参加する「居住者組合」を立ち上げ、自主運営を行うかたとなりませう。

居住者の方は、それぞれ自立した個人として、話し合いをし、一人ひとりにとって快適な暮らしを育て続けています。コレクティブハウジングが、かつて「新卒なもの」ではなく、望めぬでも選択できるよ、今後とも活動を続けていきたいと思っています。(談)

いった。もともと(コレクティブハウスに住みたい)という部分での価値観は共通していますから、頼むいわけではない。むしろ、安心感があります(矢田さん)

ここでは、自立した個人と個人が、ゆるやかなつながりを保っている。それゆえ、暮らしに「安心」がもたらされるのだ。血縁でもなければ、地縁でもない、新しいつながりが生まれつつある。

コミュニティで顔の見える関係を築く

当然のことだが、ほとんどの居住者は、日中、仕事に出ている。別段、のべつまくなしに顔を突き合わせているわけではない。「普段は、その程度だったとしても、それが支えになっている部分も大きいと思うんです。もちろん、1週間以上、顔を合わせ



コミュニティの時間、夜7時頃から、三々五々、集まってくる。帰宅が早い人は、別に取り分けておく。コミュニティの代金は、ハウス内で使用するチケットで支払

おかずを盛り付け、カウンターに並べておく。この日の参加者は大人23名、子供1名

ない方がいたとしたら、(どうしたんだろうな?)と心配になります。まあ、あたりまえといえば、あたりまえの関係なんですけど(笑)(山下さん)

そういう意味では、居住者にとって、週に数回、開催されるコミュニティ(夕食)は、大切な時間だろう。これは、希望者が事前に予約し、当番が調理や片付けを担当するという仕組みだ。当番は3名。割り振りは、調理2名、片付け1名。調理に関しては、メイン当番が献立を考え、サブ当番はそれを補助する役目だ。この日のおかずはブログだった。

「メイン当番が回ってくるのは月に1回程度。ですから、思っているほど大変なことではないんです(矢田さん)

大勢で食卓に集い、談笑しながら、食

すること。こうした「顔の見える関係」が、安心感を下支えしているのだ。これこそ、コレクティブハウスを象徴する光景だろう。よく子供たちは、大勢の大人に囲まれ、楽しそうに過ごしている。この日は、矢田さんが、山下さんのお子さんをあやす姿も見られた。そういうあるまじい、ごく自然に行われているのだ。

面白いことに、当番が担当するのは、調理と盛り付けのみ。三々五々キッチンにやってくる居住者がそれぞれ自分でテーブルに料理を持って行く。なるほど、食事の量はそれぞれ違う。働きざかりの大人だけでなく、子供や高齢者もいるのだ。こうした大きな部分にも、「自立した個人」の「ゆるやかなつながり」が垣間見える。

コーポラティブハウス(東京都) 住まいづくりのプロセスで生じる自然な「交流」

取材文 大城誠司 photo 新井卓

地域密着型の暮らしを求めて

今回取材するコーポラティブハウス(※)が完成したのは2009年。入居希望者の話し合いから生まれた集合住宅だ。コーポラティブハウスの建設は、入居希望者が建設

組合を結成し、設計監理などに関する意見交換を交わすかたちで進めていく。入居後は、管理組合を結成し、自主運営。入居前に頻繁に顔を合わせることになるので、入居の時点で、居住者同士、すでに顔なじ

みの関係となっている。

元の地権者は、明治元年に創業した老舗の商店。建物の建替えを検討した際、コーポラティブハウス形式の共同建替えを実施した。こうした選択の裏側には、居住者と



広々としたリビング。右手奥は書斎スペース。可動式の開仕切り収納庫は、ひとつつながりの空間として使用できる。ここでは住人同士のパーティも行われる



住戸の設計に関しては、世帯ごとに打ち合わせをするので、開取や収納など、自分たちの生活スタイルに沿ったものを実現できる。宮木家では可動式の開仕切りを設置した